

〔論 文〕

ブリティッシュ・ライブラリーの起源

——大英博物館図書館とイギリス全国書誌機構の合併に至る経緯を中心に——

藤 野 寛 之

I はじめに

ブリティッシュ・ライブラリー (British Library, 以下BLと略) は1960年代当時のイギリスの国立図書館ならびに関連する諸機関が合併して出来あがった新たな国立図書館である。「国立図書館委員会」(委員長フレデリック・デイントン (Frederick Dainton, 1914-1997) の名をとり「デイントン委員会」と呼ばれる) が調査・検討した結果, 合併の対象となった組織は大英博物館図書館 (British Museum Library, 以下BMLと略) とその組織下にあった国立科学発明参考図書館 (National Reference Library of Science and Invention, 以下NRLSIと略), 国立中央図書館 (National Central Library, 以下NCLと略), 国立科学技術貸出図書館 (National Lending Library for Science and Technology, 以下NLLSTと略), イギリス全国書誌機構 (British National Bibliography, 以下BNBと略) の5つの組織であり, さらに政府機関となる科学技術情報局 (Office for Scientific and Technical Information, 以下OSTIと略) も合併の対象とされていた。BL統合前の組織であるNCL, NLLST, OSTIの概要はすでに発表済¹⁾のため, 本稿ではBL統合前の組織BML²⁾とBNB³⁾の特質を指摘する。そのことにより, 国立図書館BLがいかなる背景で成立し, 設立当初, いかなる機能を持ちえたかを明らかにしたい。BLに合併された機関の背景と合併に至る経緯を知っておくことは, その後に成立した組織BLの機能と本質を知るうえで重要となる。本稿では特にBMLとBNBが合併された経緯を中心に論じる。BMLはその発達が阻害された結果の合併であったのに対し, BNBはイギリスにおける書誌提供分野の中心的な存在となり, その機能を取り入れるための合併であった。

II 大英博物館図書館 (BML)

1. 19世紀までのBML

1753年の設立から19世紀初頭にかけて, これといった特色がなかった大英博物館の図書館部門 (BML) が, いかにしてBLの研究コレクションを支えるほどの国家的な図書館となりえたのか, しかも, この図書館は20世紀半ばにはその機能すら問われかねない状況に陥っていた次第を理解しておかないと, その後にこの機関がBLになぜ組み込まれることになったかを理解できない。一言で述べるなら, BMLは, 20世紀の初頭まで (ヴィクトリア朝の最後の時期まで), この国の威勢を背景に順調な発達を続けたが, 20世紀に入ると逆境に立たされるようになる。戦争による被害を受けたBMLをその苦境から救ったのは, ここをBLとして生まれ変わらせた「デイントン委員会」の提言であった。

この図書館の特徴の一つは, 独特な発達を遂げた, そのコレクションの内容にあった。主として19世紀の一世紀にわたって追加してきた資料には, イギリスの貴族階級が個別に収集してきたものが多く, そこには王室からの蔵書の寄贈も個人的な文書も含まれ, 外国語のものも多かった。その価値は比類がなく, この歴史的な文献コレクションが最大の存在価値であった⁴⁾。これらのコレクションを利用する

ためにロンドンを訪れる利用者はBLへと組織が変わった現在でも多い。さらに、19世紀には納本制度の完全な実施により、国内出版物を徹底的に収集していた⁵⁾。コレクションの利用については、大英博物館の象徴でもあるドーム状の円形閲覧室の周辺に参考コレクションを巡らせる構造を採った。この蔵書の管理方法も、その後の図書館の先駆的な例となる。

19世紀、ヴィクトリア朝の時期に、この図書館を急成長させたのは、アントニオ・パニッツィ (Anthony Panizzi, 1797-1879) である。パニッツィがBMLの刊本部長になったのは1837年であり、図書館長となったのは1856年、その地位を退いたのは1866年であった。パニッツィは、国内出版物の納本の完全実施だけでなく、外国語の資料も徹底して収集した。パニッツィが「図書館の貴公子」⁶⁾と呼ばれた理由は、彼がBMLの蔵書を世界最大規模のコレクションにまで引きあげた功績からである。これらコレクションを構築する一方で、パニッツィは収納場所および利用者のための閲覧スペースの確保にも尽力した。1857年に完成した大円形閲覧室は円形ドーム型で、内部の広さは直径42メートル、高さ32メートルとセント・ポール寺院を超える規模のものであった⁷⁾。この型の図書館はその後、アメリカ合衆国でも出現するようになる。

パニッツィを継いだ次代館長ジョン・ウィンター・ジョーンズ (John Winter Jones, 1805-1881) は、先代の方針を継承し、コレクションをさらに発展させた。特に植民地各国の資料を充実させている。1878年にジョーンズに代わって館長となったエドワード・ボンド (Edward Bond, 1815-1898) は、いくつかの方向を実現させた。開館時間を並び、新館を建て増し、増大した写本部の資料を収納した。東洋刊本写本部もこの時期に新設された⁸⁾。しかし、コレクションの増加のため、大英博物館の体制そのものの解体もすでに始まっていた。1883年には自然科学の標本類が自然史博物館に移された⁹⁾。そして、1902年、収蔵しきれなくなった大量の新聞に対し、理事会はやむをえず別館を用意せざるをえなくなり、大英博物館から電車で1時間ばかり離れた郊外の地に1905年「新聞図書館」を設置した。この別館から要求された資料が本館に運ばれた¹⁰⁾。

2. 『デイントン報告』までのBML

ボンドの次に大英博物館の運営を担ったのは、古写本の権威フレデリック・ケニヨン (Frederic Kenyon, 1863-1952) であった¹¹⁾。ケニヨンも、ヨーロッパのあらゆる資料の収集拡大に努めた。そして、ケニヨンは、政府が任命した委員会の議長として1927年に報告書(『ケニヨン報告』)をまとめた¹²⁾。ここでは、イギリス国内全体における公共図書館網の確立の必要性を指摘し、大英博物館の役割にも言及した¹³⁾。

第一次世界大戦期のこの図書館の直接の被害はさして大きくはなかったが、第二次世界大戦期では、円形閲覧室がドイツ軍の爆撃で一部破壊され、約20万冊の蔵書が失われた¹⁴⁾。戦時期のことで、職員の多くは前線に動員されており、人手は極端に少なかった。

20世紀後半になると、コレクションの拡大にともなって、資料収納場所、すなわち保存スペース確保の問題が深刻化してきた。大英博物館理事会は資料の館外移転を決議し、1964年、刊本部の図書の一部を旧ウールウィッチ兵器庫の建物に移動させた。東洋刊本写本部も付近の建物に移転した。館外保管の資料はますます増加の一途をたどった。場所が分散するとともに、利用者が資料を手にするまでの待ち時間は増え、待ちきれない利用者も多く存在した¹⁵⁾。

『デイントン報告』によりBMLがBLに編入されるまでの図書館最後の時期はフランシス (Frank Chalton Francis, 1901-1988) が館長の時代である。フランク・フランシスは、1926年に刊本部の助手、1929年には博物館の書記となった生え抜きの図書館員¹⁶⁾であり、1949年に創設されたBNBの執行委員会の委員でもあった。フランシスが取り組んだ大きな仕事は二つあった。その一つはNRLSIの設立であ

り、他の一つは新館の実現であった。後者は実現に至らなかったが、BLへの編入を誘発した点を鑑みると、この努力は特筆に値する。なお、彼が引退した1968年はBMLの将来を決めた「デントン委員会」が本格的に活動を開始した年であった。

1948年より刊本部長であったフランシスは、1951年には科学技術分野の参考コレクションを図書館内に作りあげるため、科学技術資料の参考図書館であった特許局の図書館(1855年の設立でホルボーン地区にあった)を核とする科学技術情報の参考図書館を計画した。理事会は1954年にこれを了承したが、他方、政府の別組織となる科学産業研究庁(Department of Scientific and Industrial Research)は1956年に科学技術資料の貸出図書館の設置を計画していた¹⁷⁾。同庁にいたドナルド・アーカート(D. J. Urquhart, 1909-1994)がこの計画の推進者であった。ともに国立の科学技術資料の図書館であったが、一方は参考図書館、もう一方は貸出図書館であり、両者の機能は異なっていた。アーカートの企画が具現化したNLLSTは1962年にヨークシャー州で業務を開始し、フランシスのNRLSIは1966年に大英博物館の組織に編入された。特許局の図書館はこの時にはすでに40万点の資料を持っていた¹⁸⁾。大英博物館の刊本部はこのコレクションのためにハイドパークの北のベイスウォーター地区のデパートを借り受け、ホルボーンの本館に収容しきれない資料を収めることとした¹⁹⁾。大英博物館の組織下に入ったNRLSIは100万点を超える資料の所蔵を目ざすこととなる。これに対し、NRLSIと同様、科学技術資料の収集に取り組んでいた科学博物館図書館(Science Museum Library, 以下SMLと略)のほうは、NRLSIの資料規模におよばず、その後に「デントン委員会」からその機能を問われることになった。国立図書館を総合した一大組織にSMLが加わらなかったのは、こうした理由からであったと思われる²⁰⁾。

1959年3月、BML理事会の図書館建築委員会で新館の候補地と建築家の候補が議論された。館長は直ちに建設省(Ministry of Works)と接触した。建設省は、1960年度から敷地の買収に乗り出し、ロンドン地区評議会の都市計画が完了する1967年までには予定地の再開発を済ませたいとの意向であった。問題はこの地にある歴史的な建造物と当地に住む住民の立ち退き問題であった²¹⁾。

1961年末、理事会は王立イギリス建築家研究会の会長と建設省の責任者を招いて意見を聞き、翌年にはレスリー・マーチン(Leslie Martin, 1908-2000)およびコーリン・セント・ジョン・ウィルソン(Colin St. John Wilson, 1922-2007)に設計を依頼することを決定した²²⁾。マーチンは、1953年より1956年までロンドン地区評議会の建築家であり、1956年から1972年にケンブリッジ大学の建築学教授、1957年には叙勲を受けていた。ウィルソンは、マーチン教授の弟子で、後の1975年から1989年にはケンブリッジ大学の教授となり、1998年に叙勲されることになった人物であった。両者は1963年の11月に最終の建築計画を提出した。この計画によると、大英博物館の南、通りを隔てた新オックスフォード通りまでの7エーカーの敷地に新館を建設、博物館の南正面にあたる、新オックスフォード通りに面した聖ジョージ教会はそのまま保存し、その周囲の敷地は広場としておく、建物はこの広場を中央に挟んだ左右に分かれ、ブルームズベリー地区の東側に建つ東館には、座席数2600を予定した閲覧室および書庫、刊本部と写本部が入り、西館には版画部と四つの部の展示室、講堂と食堂が予定されていた。さらに新館と旧館とは地下で連結されることになっていた²³⁾。博物館の西に隣接する敷地には、新館予定地から立ち退く住民400所帯のための住居が用意される予定であった。教会周辺の広場は無駄ではないか、教会の背面をむきだしにするのは適していないとの意見などはあったものの、計画案は理事会で基本的には了承された²⁴⁾。

1966年に入ると、敷地獲得の交渉が難航していることが分かってきた。ブルームズベリー地区の西側にある薬学協会の建物の取り壊しに大ロンドン評議会(ロンドン地区評議会の後身)の歴史建造物委員会が反対したのである。加えて、1966年7月には下院議員レナ・イエーガー(Lena Jeger, 1915-2007)がカムデン地区評議会と住民の請願を支持し、議会で質問して、政府案の撤回を主張した。建設省はこ

の間にも、グレイト・ラッセル通りの南、博物館より西方にあるYWCAの宿舎を含めた敷地の買収に当たろうとしていた²⁵⁾。

1967年10月25日、理事会の代表は新任の教育科学大臣ゴードン・ウォーカー (Gordon Walker, 1907-1980) に呼び出され、政府が博物館の南の隣接地に図書館の新館を建設する計画を放棄すると伝えられた。政府は直ちに上下両院でこの件に関する声明を発表した。それと同時に、現存の複数の国立図書館の機能を再検討する特別委員会を設置するとの決定が知らされた²⁶⁾。

1967年12月に発足した「デントン委員会」の呼びかけに応じて、大英博物館の理事会は、85頁におよぶ文書を同委員会に提出した。そこには27頁にわたる活動報告とこれを証明する統計資料が付けられていた。理事会からの要望の骨子は、場所の問題の解決への政府の理解と支持が主であった²⁷⁾。「デントン委員会」は、理事会の提出資料とともに、独自の利用調査を実施²⁸⁾し、さらにBMLに対する国内の大学、図書館、産業界、学協会からの意見を聴取し、『デントン報告』の勧告にまとめた。BMLに関する提言の主な内容は以下の通りである²⁹⁾。

【勧告21】BMLの運営には……図書館管理の近代的手法に通じた職員を必要とするであろうが、相当数の主題専門家は続けて必要とされるであろう。

【勧告22】芸術および人文科学のためのBMLの将来方針は、そのコレクションがユニークさを発揮してきたこれらの主題の完全網羅を引き続き提供せねばならない。大規模専門図書館がすでに国内の需要をかなりの割合でまかなっているようなその他の領域においては、BMLの収集方針は……他のすべての図書館蔵書がもっとも効果的に活用されるよう考慮されなければならない。

【勧告23】版画・素描部は、図書館の一部局と見なされ、全国的な参考図書館サービスを考慮するさいにこれが含まれていなければならない。

【勧告25】BMLによる芸術および人文科学の収集方針を貫く原則は、社会科学の資料にも適用されるべきである。

【勧告29】BMLは歴史研究者その他の図書館の主たる利用者にとって重要と見なせる科学出版物を続けて収集すべきである。このコレクションはNRLSIのものとは性格が異なり、規模はそれより小さいものとすべきである。

【勧告35, 37】BMLおよびNRLSIの一部の資料については、安価な費用の土地に移し変えるべきである。移転された資料は、24時間以内に本館に戻るようにすべきである。

【勧告39】コリンデル(分館)での新聞と雑誌の保存は継続させねばならないが、もっとも利用頻度の高いもののマイクロ形態の複製は、BMLの中央閲覧室に常備して、参照できるようにしておくべきである。

【勧告45】図書館の運営は、博物館の運営から完全に切り離すべきである。

【勧告46】BMLの4つの部局、刊本部、写本部、東洋刊本写本部、版画・素描部は「国立参考図書館(National Reference Library)」とすべきである。

【勧告54, 55】BMLが古美術部門と地理的に切り離されることは、職員や利用者にとって利益とはならないし、国立図書館サービスの助けにもならない。このため……ブルームズベリー地区が国立参考図書館にとって最適の場である。何らかの理由で、分散が避けられない場合には、国立参考図書館の立地は、ブルームズベリー地区とオールドウィッチ地区の両方の機関に通う人たちにとって便利なロンドン中央で探すべきである。

3. 『デントン報告』後のBML

大英博物館理事会は、「デントン委員会」の勧告内容について基本的には賛成した。大規模な合併はあっても、BMLの独自性は保たれ、博物館とは別組織の新館が実現する見通しがたったからである。名称の変更などはたいした問題ではなかった。新館の場所がブルームズベリー地区、それが叶わぬときには他のロンドン中心部とした委員会の勧告もむしろ歓迎すべきものであった。

理事会は、新組織を検討する委員会の委員に博物館の理事を加えるよう期待していた。新たな図書館の参考局が発足する以前に、大英博物館との間に資料面で合意しておかねばならない点があったからである。その一つは、版画・素描部が博物館に残るのか新たな組織に移るのかであった。結局、この部門は博物館に留まることとなった³⁰⁾。

1970年6月に総選挙でハロルド・ウィルソン (James Harold Wilson, 1916-1995) 内閣からエドワード・ヒース (Edward Richard George Heath, 1916-2005) 内閣に交代、新首相のヒースは大英博物館理事会議長のエクルズ卿 (Lord Eccles, 1904-1999) を芸術担当の大蔵省主計官に任命した³¹⁾。彼は理事会から身を引いたが、かえって図書館計画に関与できる立場となる。

『ブリティッシュ・ライブラリー (*The British Library*)』と題した「白書」³²⁾は、1971年1月に議会に提出された。新図書館の性格は「デントン委員会」の勧告内容に沿っていたが、BMLの性格ははっきりと定められていた。国の中央図書館として、すべての国内出版物とできるだけ多くの外国資料を研究者のために保存すること、NRLSIの資料も併せて、新たに予定されるブルームズベリー地区の新館に収蔵されることが記されていた³³⁾。理事会はBMLを代表する三部門の部長を議論のために招いた。ここで問題にされたのは、将来を考慮した書庫にどれだけの保存スペースが必要か、とともに、博物館にある資料の配分をどうするかであった。東洋刊本写本部にある挿絵本は「美術資料」なのか「印刷資料」なのか争われた。特に江戸時代の版画本と一枚刷りの版画については議論があったが、理事会はこれまでどおり東洋刊本写本部が所蔵することに決定した。理事会は劇作家ジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) の遺贈資産についても博物館と図書館のいずれが管理すべきかを決めねばならなかった³⁴⁾。

1971年6月、BLの組織委員会が発足し、議長にエクルズ卿、副議長に教育科学省の副大臣フックウェイ (Harry T. Hookway, 1921-2014) が選ばれた。委員には、新規の図書館を構成する機関の代表者、および、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学の図書館長が加わった³⁵⁾。

『ブリティッシュ・ライブラリー法』が議会で可決され、新図書館は1973年7月1日に活動を開始した³⁶⁾。BMLはコレクションを新図書館に譲渡し、BMLは約220年にわたる歴史の幕を閉じた。その時点ではブルームズベリー地区に出来る予定の新館に期待をかけていた。

Ⅲ イギリス全国書誌機構 (BNB)

1. BNBの誕生

イギリスの図書館界では、歴史の古いオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、大英博物館の図書館をはじめとして、資料の分類法と目録記述はそれぞれが独自の方式を採用していた。新たに発足するBLにあっても、参加予定各館の資料組織化の業務はバラバラであった。とはいえ、機械処理の導入にともない、記述の統一は必須であった。第二次世界大戦後の時期に発足し、歴史は浅かったものの、週刊版『イギリス全国書誌 (*British National Bibliography*)』を発行し成功を収めていたBNBがBLに参加するのは時代の当然の帰結であった。

イギリスで目録記述の標準化に取り組むきっかけを作ったのは、1927年の『ケニヨン報告』である。

「全国の図書館において、それぞれが独自に所蔵資料の目録作成を続けている。当然、目録作成の経費はそれぞれ独立した作業に対してかかっており、それは各図書館が負担している。こうした方法では、作業は重複し、それにとまなう浪費が生じる」³⁷⁾。委員会の見解は、こうした無駄な作業は単に作業の重複だけでなく、作業の効率までを奪う結果をもたらすと指摘であった。次いで、目録記述の標準化の必要性を指摘したのは、1942年に発表された『マッコルヴィン報告』³⁸⁾である。この報告では「公共図書館各館が独自の目録を作成・提供するのは不経済である」と指摘していた³⁹⁾。マッコルヴィン (Lionel Roy McColvin, 1896-1976)⁴⁰⁾ はどの図書館でも利用できる書誌情報の提供こそが図書館にとって必要であり、それこそが目録の機能であると確信していた。

図書館協会は1947年5月に集中目録サービスの可能性を検討する委員会の設置を勧告した。設立された検討会は「印刷カードの配付はイギリスの図書館の現況では財政的に不確かである」との結論に達し、書誌情報を提供する別の手段がないかを検討した⁴¹⁾。出版社の販売目録はすでに刊行されていたが、いずれも完全な記録ではなかった。検討会は全国的な書誌の作成と頒布の手段を考案すべきであるとの結論を出した。次いで、1948年5月、図書館協会、BML、図書出版協会、書籍販売組合、全国書籍連盟が共同の委員会を成立させ、この問題を取りあげた。イギリスの図書の出版記録は、国外にも販路が見こめた。同年には、王立協会の科学情報会議のなかでも、科学コミュニケーションのために統一基準の刊行物目録の必要性を示唆していた⁴²⁾。合同委員会は、イギリスの出版物の総目録を新たな形で刊行するための施設および設備、印刷と流通、財政を検討し、1949年1月、合同委員会の構成諸機関からの代表とブリティッシュ・カウンシルの代表を加えた協議会を設置することを決定した。こうしてBNBは1949年3月に発足した。

2. 『デントン報告』までのBNB

1950年初頭から刊行の週刊版『イギリス全国書誌』は、毎週約300タイトルの新刊図書の記録を予定していた。経費は総額1万2000ポンドと見積もられ、年間講読料は12ポンド、1000人の予約があるとして1万2000ポンド以上の売上になると予測されていた⁴³⁾。分類はデューイの十進法、目録規則は1908年版の「英米目録規則(AACR)」が適用された。編集長には、図書館協会で目録の標準化に熱意を持って取り組んでいたアクトン図書館の副館長ジャック・ウェルズ (Jack Wells) が充てられ、職員は7人、大英博物館の敷地内に仮事務所が構えられた⁴⁴⁾。

1950年1月4日に最初の『イギリス全国書誌』の週刊版を発行した。全10頁、各頁は片面印刷で、各頁には25項目が印刷されていた。こうした印刷形式は、そのもの自体を切り取って図書館カードに貼り付けることが出来るようにするためであった。初年度末までには、1万3251項目が週刊リストに掲載され、購読者数は目標に達していた。しかし、出版と流通にかかわる費用の予測が甘すぎたため、大幅な赤字を計上することとなった。1950年7月に実施した講読者アンケートの結果、図書館ではこのリストをカードに貼り付けて利用していないことが分かった。印刷形式を改めて、両面印刷とし、これが経費の削減につながる⁴⁵⁾。1952年に収入が初めて支出とつり合うようになり、1953年末には『イギリス全国書誌』は84ポンドの黒字を計上⁴⁶⁾、この独立採算の企画は成功した。それには公共図書館がこれを基本的な書誌記録のツールと見なしたことに起因していた。『図書館協会レコード (Library Association Record)』は「この出版物は確かに、どの図書館にとっても欠くことのできない書誌ツールとなった。どんな小さな図書館でもこの講読を無視するとは考えられない」⁴⁷⁾と書き、『タイムズ文芸付録 (Times Literary Supplement)』は「イギリスの図書を置いているすべての書店と図書館に必要な必携ツール」⁴⁸⁾と述べていた。

1956年6月から印刷カードの販売に踏み切った。大規模図書館よりも小規模図書館を顧客としたこの

サービスは成功し、1957年には160館から一日平均約4000枚から6000枚の注文があり、1959年には全収入の15%に当たる一日平均1万枚から1万5000枚の売上があった。出発から7年間で軌道に乗った『全国書誌』成功の一つの要因は刊行形態の合理化にあった。経営を軌道に乗せたBNBは、1958年には1500ポンドの黒字を記録した⁴⁹⁾。1950-1954年の累積版は1958年に刊行された。この売上は経営をさらに改善させた。

1960年代に入ると、BNBの経営はさらに安定したものとなっており、ウェルズは1962年にはセイロン政府から招かれて、この国の全国書誌の指導に出かけるまでとなっていた。1967-68年の『イギリス全国書誌』の利用調査では、公共図書館が全予約購読者数の64%を占め、総合大学は5%、カレッジは18%、専門図書館は13%であった⁵⁰⁾。図書館協会が実施した別の調査では、館種を問わずイギリスの図書館の90%が週刊版を講読しており、そのうち公共図書館が占める割合は98%と圧倒的多数となっていた。『イギリス全国書誌』の講読者は、このリストの利用法として参考業務(85%)や図書選択(62%)をあげていた⁵¹⁾。こうした調査はその後の編集方針に生かされるとともに、この調査結果からは『イギリス全国書誌』がすでに図書館にとって欠かせないツールであることを示していた。

1960年代後半に『イギリス全国書誌』は1967年に改訂された『英米目録規則』の採用を決めた⁵²⁾。この措置には反対の意見もあったが、アメリカで広く採用されていた『英米目録規則(1967)』の記述との整合性を歓迎する意見が多く、『イギリス全国書誌』の講読数を増加させた。アメリカとの統一規則を採用したBNBの思惑には、目録の機械読取技術への将来の転換が含まれていた。1966年に議会図書館で開始された機械可読目録(Machine Readable Cataloging, MARC)の採用である⁵³⁾。BNBはコンピュータ利用の妥当性に関してAslibの研究部に調査を依頼した。この調査の結果、BNBは議会図書館のMARCプロジェクト研究のための資金提供を政府に申し出た。1967年にOSTIはこの研究のため、2062ポンドの助成を決定した⁵⁴⁾。この助成により、BNBと議会図書館の協力体制のもとに、イギリスでのMARCの採用実験が開始された。1967年6月から翌年にかけて、UK MARC事務局は議会図書館との合意のもとに、共通フォーマットMARC IIを完成させた。1968年12月、OSTIは、UK MARCの国内図書館への適応と国内図書館での受け入れ体制の整備のための2年間のプロジェクト経費として8万ポンドの研究支援を発表した。この助成はBLへの編入の時まで継続された。同時にOSTIは、1968年にはラフバラ大学とサウサンプトン大学に、1969年にはブリストル大学、バース大学その他に、1971年にはバーミンガム図書館共同機械化プロジェクトに助成し、MARCの普及を促進させた。1967年から1973年までにOSTIから助成された補助金は、BNBだけで総額26万4851ポンドとなっていた⁵⁵⁾。

次いで、BNBが力を注いだのは1971年に実現されたPRECIS(Preserved Context Index System)の開発であった。これは、機械可読形式のファイルから主題索引を作成するための手続きであって、「ファセット分類」による索引システムであった。分類研究グループ(Classification Research Group)の分類の基礎研究の結果からこの索引システムが導き出されていた⁵⁶⁾。そして、議会図書館によって開発された、図書刊行前の目録提供プログラムCIP(Cataloging-in-Publication)もまた、1975年に約20の出版社が計画に参加することで実現された⁵⁷⁾。

3. 『デントン報告』とBNB

1967年12月にデントンを議長とする「国立図書館委員会」が任命され、国立図書館の機能の再検討に取り組んだ。委員会の任務は、国立図書館の活動と利用状況の検討であり、そこにはBNBは含まれていなかった。この機関は国立の組織ではなかったからである。「デントン委員会」は、1968年1月にイギリス全土の主要な大学図書館や関係者個人に文書による証言の提出を求めた。各国立図書館は大部の活動報告をともなった覚書を提出したが、BNBはわずか4頁の文書しか提出しなかった。そのなかで

「BNBは他の機構と合体・編入される必要がない」と記していた⁵⁸⁾。BNBは独立性を保持すべきであると答えていたのであった。しかしながら、BNBの協議会のなかでも意見は割れていた。書籍販売組合はBNBの立場を擁護し、Aslibも独立性を保持することに賛成であった。しかし、大英博物館と図書館協会が合併に賛成であった。特に、アメリカとの『英米目録規則』の活用、および、機械可読目録の進展にあって、BNBはこの国の重要な役割を担うべきであると考えていたのである⁵⁹⁾。BNBの協議会が提出した「覚書」の結論は次の通りであった。「最も効果的な道筋は『イギリス全国書誌』刊行のための現行の体制の維持および特別補助金である」⁶⁰⁾。

文書証言を提出した他の団体で、BNBが新組織に統合されるべきであるとの意見を明確に示したのはごく少数であった。これは、「デントン委員会」の使命のなかに当初、この任務が含まれていなかったことに起因する。しかしながら、国立図書館委員会は最終的には以下のように勧告した⁶¹⁾。

【勧告60】(BNBの主たる活動がBMLおよびNCLの活動と大きく重なり合っているため)すべての書誌活動を新設の国立図書館機構のなかに国立書誌サービス部として創設して、ここに統合すること。

『デントン報告』にはBNBの協議会からの要望は取り入れられなかった。次いで1971年に発表された「白書」では、この新たな国立図書館が「国内全体の図書館と情報センターにかかわる……書誌サービスを提供すること」について記載されていた⁶²⁾。

4. 『デントン報告』後のBNB

1973年に活動を開始したBLにBNBは当初加わらなかった。職員の移行がまだ合意に達していなかったからである。BNBが最終的にBLに参加したのは1974年8月であった⁶³⁾。BNBの資産はすべて新組織に引き継がれた。その際に、総額1万ポンドの余剰金が残され、これは書誌活動および関連研究の推進のための「イギリス全国書誌研究基金(British National Bibliography Research Fund)」として外部の団体による研究開発支援のために活用されることになった⁶⁴⁾。

BNBがBLの一部局(書誌サービス局)として編入・統合された経緯は上述のとおりであるが、独立採算で成立していた外部の組織を国の図書館が組み込んだ理由はいかなる点にあったのだろうか。最大の理由は、一国の図書館活動にとっての「全国書誌」の役割が明白となっており、その提供方法についての研究開発が重要となっていたからである。1970年代の初頭までに、BNBはすでに20年の歴史を持ち、見事な成果をあげていた。法定納本の制度をすでに19世紀から実施していながら、イギリスではその書誌記録は特定の図書館が自分のところの記録として独自の方法で編纂していた。販売書誌は別にあったが、正確な記録とはいえないものであった。BNBは、大英博物館の著作権受理局の協力のもとに、独力でその記録に取り組み、全国書誌を実現させたのであった。

BNBがその活動を評価されたのは、次のいくつかの面から考察できる。第一は機械化(オートメーション化)の実現である。イギリスはアメリカ議会図書館とほぼ同時期に機械可読目録の実現に成功していたが、その原動力となったのはBNBであった。この組織はさらに、ファセット方式の分類体系を追求する「分類研究グループ」の理論をもとに、PRECISを開発した。こうした活動がいずれもOSTIの支援下でなされたことは、それらの重要性が政府により認識されていたことの証左であった。

BNBによる全国書誌の編纂実務が諸外国で評価されたことは、この機構の代表であるウェルズが、セイロンやオーストラリアに技術指導のため招聘されていたことから推察できる。各国が全国書誌の提供に取り組み始めた時期に、イギリスはリーダーとしての役割を担っていた。それは、後にIFLA(国際図書館連盟)における書誌面での指導的な立場を発揮したイギリスの活動の先触れともなっていた⁶⁵⁾。

国際的な協力への寄与は、アメリカとの関係、特に議会図書館とアメリカ図書館協会との協力関係にも現れていた。「分担目録（シェアード・カタログング）」プロジェクトにおける議会図書館への貢献は、BNBの実力を示した活動だったと言える⁶⁶⁾。

実務面でもBNBはさまざまな実績をあげていた。『イギリス全国書誌』およびその累積版の刊行の他に、1971年には『イギリス音楽目録（BCM）』のシステム開発、1972年には『イギリス教育索引（BEI）』の制作、『ブックセラー』誌や『ブリティッシュ・ブックス・イン・プリント』といった出版物販売リストのシステム開発も手がけた。『イギリス人文科学索引（BHI）』にも『イギリス技術索引（BTI）』にも関与しており、1972年には『イギリス全国映画目録（BNFC）』の作成にも着手していた。さらにBNBは、アメリカのナショナル・キャッシュ・レジスター社との共同開発で、1970年10月に『ブックス・イン・イングリッシュ』と題するマイクロフィッシュ版の書誌の刊行に取り組んで成功を収めていた⁶⁷⁾。

IV 結語

イギリスでは1967年から1968年にかけて、地域ならびに国立図書館への公的支出が6000万ポンドに達しており、図書館運営の「経済性と効率性」を問題にせざるをえなかった⁶⁸⁾。「デントン委員会」に課せられた要請は、イギリスの図書館政策全体にかかわる「新たな方向」を示すと同時に、このように財政が切迫したなかでのイギリスにおける図書館の保守的な体質、特にBMLのような機関の意識改革であったように思われる。一般に長い伝統や歴史を持つ機関の改革は難しいが、BMLの場合はぬるま湯の状態に置かれていたため、この意識改革は特別なものであった。『デントン報告』の勧告は、政府の大英博物館に対する一つのメッセージでもあった。

一方、BNBは独立の財政による独自の活動をしていた組織であったが、それまでの実績ならびにその活動が高く評価されていたからこそ、イギリスにおける書誌業務の中心的役割を担うため、BLに組み込まれた。同時に、複数組織の合併の帰結となるBLが、『デントン報告』が目指す「経済性と効率性」の実現に向け、新たな組織全体の書誌サービス活動のために同機構のサービスを吸収する必要に迫られていたこともまた事実であった。

注

- 1) 藤野寛之「国立科学技術貸出図書館（NLLST）の設立と1960-1970年代イギリス図書館政策にたいする影響」*Journal of Library and Information Science*, 20, 愛知淑徳大学図書館情報学会, 2007, 27-47ページ; 藤野寛之「『デントン報告』とブリティッシュ・ライブラリーの成立」*Journal of Library and Information Science*, 21, 愛知淑徳大学図書館情報学会, 2008, 57-66ページ; 藤野寛之「イギリスにおける図書館情報学の研究開発: ブリティッシュ・ライブラリーの研究開発支援体制構築の背景と刊行された報告書の検討を中心に」*Journal of Library and Information Science*, 22, 愛知淑徳大学図書館情報学会, 2009, 19-35ページ; 藤野寛之「イギリスにおける情報活動の変遷 - Aslibの成立とその活動の意義 -」『サビエンチア』, No.43, 聖トマス大学, 2009, 77-92ページ; 藤野寛之「ブリティッシュ・ライブラリーの起源: 1 国立中央図書館の役割とその意義」『サビエンチア』, No.44, 聖トマス大学, 2010, 67-82ページ; 藤野寛之「ブリティッシュ・ライブラリー創設の背景: 20世紀におけるイギリス国立図書館の変遷と機能の再検討」『阪南論集 人文・自然科学編』, 48巻(1), 阪南大学学会, 2012, 1-10ページ; 藤野寛之「イギリスにおける図書館関連団体報告書の変遷: ブリティッシュ・ライブラリーの起源」『阪南論集 人文・自然科学編』, 53巻(2), 阪南大学学会, 2018, 27-39ページ。
- 2) 大英博物館図書館の歴史には, Esdaile, Arundell, *The British Museum Library*, London: Allen and Unwin, 1946, 388p; Harris, P. R., *A History of the British Museum Library, 1753-1973*, London: British Library, 1998, 833pがある。創設初期の事情については Edwards, Edward, *Lives of the Founders of the British Museum with Notices of its Chief Augmenters and Other Benefactor*, London: Trübner, 1870, 780pも参考になる。
- 3) イギリス全国書誌機構の歴史には, Stephens, Andy, *The History of the British National Bibliography 1950-*

- 1973, Boston Spa: British Library National Bibliographic Service, 1994, 159p がある。翻訳書も刊行されている(松村多美子訳『英国全国書誌の歴史』日外アソシエーツ, 1998, 総160ページ)。「イギリス全国書誌研究基金」の研究開発支援の詳細については、藤野寛之『ブリティッシュ・ライブラリー図書館情報学研究開発報告目録: 1965-2002』金沢文圃閣, 2009, 275-295ページを参照すること。
- 4) 大英博物館図書館のコレクションについては、次の文献が参考になる、ニコラス・バーカー著、松田隆美訳『大英図書館: 秘蔵コレクションとその歴史』ミュージアム図書, 1996, 総287ページ。
 - 5) 藤野幸雄『大英博物館』岩波書店, 1975, 115-116ページ。
 - 6) エドワード・ミラーの次の文献を参考にすること, Miller, Edward, *Prince of Librarians: The Life & Times of Antonio Panizzi of the British Museum*, Ohio: Ohio University Press, 1967, 356p.
 - 7) 藤野幸雄『資料・図書館・図書館員-30篇のエッセイ-』日外アソシエーツ, 1994, 96ページ。
 - 8) Harris, P. R., *A History of the British Museum Library, 1753-1973*, London: British Library, 1998, pp.311-374.
 - 9) 藤野幸雄, 前掲書(『大英博物館』), 128-129ページ。
 - 10) Harris, P. R., *A History of the British Museum Library, 1753-1973, op. cit.*, p.375.
 - 11) Wolfe, John, "Frederick Kenyon", *Oxford Dictionary of National Biography*, vol.31, 2002, pp.341-343.
 - 12) Board of Education, *Public Libraries Committee. Report on Public Libraries in England and Wales*, London: His Majesty's Stationery Office, 1935, 216p. (本研究では1935年に再販された資料を活用。)
 - 13) 藤野寛之「イギリスにおける図書館関連団体報告書の変遷:ブリティッシュ・ライブラリーの起源」『阪南論集 人文・自然科学編』, 53巻(2), 阪南大学学会, 2018, 32-33ページ。
 - 14) T・ケリー, E・ケリー著, 原田勝, 常盤繁訳『イギリスの公共図書館』東京大学出版会, 1983, 188ページ。
 - 15) 藤野寛之訳「大英博物館図書館の主要調査結果(概要)」, 1968年4月『ブリティッシュ・ライブラリー成立関係資料集』金沢文圃閣, vol.1, 2010, 258-259ページ。
 - 16) Harris, P. R., *A History of the British Museum Library, 1753-1973, op. cit.*, p.489.
 - 17) Ibid., p.620.
 - 18) Ibid., p.622.
 - 19) Ibid., p.623.
 - 20) 藤野寛之訳「国立図書館委員会報告」『ブリティッシュ・ライブラリー成立関係資料集』金沢文圃閣, 2010, 72-80ページ。
 - 21) Harris, P. R., *A History of the British Museum Library, 1753-1973, op. cit.*, pp.673-674; 藤野幸雄, 前掲書(『大英博物館』), 170-171ページ。
 - 22) Harris, P. R., *A History of the British Museum Library, 1753-1973, op. cit.*, pp.674-675.
 - 23) Ibid., p.675.
 - 24) Ibid., pp.675-676.
 - 25) Ibid., p.676.
 - 26) Ibid., p.677.
 - 27) Memoranda submitted by the Trustees of the British Museum, *Principal Documentary Evidence, submitted to the National Libraries Committee*, London: Her Majesty's Stationery Office, 1969, pp.A7-A33.
 - 28) 藤野寛之訳「国立図書館委員会報告」, 前掲書, 268-307ページ。
 - 29) 同上書, 205-220ページ。
 - 30) Harris, P. R., *A History of the British Museum Library, 1753-1973, op. cit.*, p.682.
 - 31) Ibid., p.682.
 - 32) 藤野寛之訳「白書」『ブリティッシュ・ライブラリー成立関係資料集』金沢文圃閣, 2010, 9-17ページ。
 - 33) 同上書, 10-11ページ。
 - 34) Harris, P. R., *A History of the British Museum Library, 1753-1973, op. cit.*, p.685.
 - 35) 藤野寛之「[「デイントン報告」とブリティッシュ・ライブラリーの成立]」*Journal of Library and Information Science*, 21, 愛知淑徳大学図書館情報学会, 2008, 62ページ; 田中梓「英国図書館(The British Library)の誕生」『図書館研究シリーズ』, no.18, 国立国会図書館, 1977, 33ページ。
 - 36) 松村多美子「ブリティッシュライブラリー第一年次報告1973-74」『ドクメンテーション研究』, 25(6), 情報科学技術協会, 1975, 237ページ。
 - 37) Board of Education, *Public Libraries Committee. Report on Public Libraries in England and Wales, op. cit.*, pp.167-173.
 - 38) McColvin, Lionel R., *The Public Library System of Great Britain: A Report on Its Present Condition with Proposals for Post-War Reorganization*, London: Library Association, 1942, 218p.

- 39) Ibid., pp.163-166.
- 40) ライオネル・マッコルヴィンについては次の文献を参考のこと、藤野幸雄、藤野寛之『図書館を育てた人々 イギリス篇』日本図書館協会、2007、172-178ページ。
- 41) アンディ・ステイーヴンス著、松村多美子訳『英国全国書誌の歴史』日外アソシエーツ、1998、5-6ページ。
- 42) *The Royal Society Scientific Information Conference, 21 June-2 July 1948: Report and Papers Submitted*, London: Royal Society, 1948, pp.205, 650-652.
- 43) Joint Committee on National Bibliography, "Memorandum", *Library Association Record*, vol.51, March 1949, p.82.
- 44) 吉川藤一、松村多美子「英国における図書館活動：主として行政の側面から見た報告」『大学図書館研究』, 5, 大学図書館研究編集委員会, 1974, 5ページ。
- 45) アンディ・ステイーヴンス, 前掲書, 11-14ページ。
- 46) 同上書, 18ページ。
- 47) "The British National Bibliography", *Library Association Record*, vol.53, December 1951, p.420.
- 48) "The British National Bibliography", *Times Literary Supplement*, 4, July 1952, p.444.
- 49) アンディ・ステイーヴンス, 前掲書, 22ページ。
- 50) Lewis, P. R., "The demand for the British National Bibliography", *Journal of Librarianship*, vol.1, no.2, 1969, p.96.
- 51) "The British National Bibliography Questionnaire: A Report", *Library Association Record*, vol.67, February 1965, pp.52-54.
- 52) Downing, J. C., "The Anglo-American Cataloging Rules. 1967", *Library World*, 70, 1969, pp.203-204.
- 53) Coward, R. E., "BNB and computers", *Library Association Record*, vol.70, August 1968, pp.198-199.
- 54) アンディ・ステイーヴンス, 前掲書, 50-52ページ。
- 55) 同上書, 57ページ。
- 56) 「分類研究グループ」は1948年の王立協会科学情報会議の後、ブライアン・ヴィッカーリーなどによって1952年に結成された分類理論検討を目的とするグループである。PRECISについては次の文献を参考にすること、Austin, D. W., "The development of PRECIS: a theoretical and technical history", *Journal of Documentation*, vol.30, no.1, 1974, pp.47-102.
- 57) アンディ・ステイーヴンス, 前掲書, 103ページ。CIPについては次の文献も参考にすること、Hamilton, M., "Cataloging-in-Publication (CIP)", *British Library Bibliographic Services Division Newsletter*, no.1, 1976, pp.5-6.
- 58) Memorandum submitted by the Council of the British National Bibliography, *Principal Documentary Evidence submitted to the National Libraries Committee*, London: Her Majesty's Stationery Office, 1969, pp.A92-A95.
- 59) アンディ・ステイーヴンス, 前掲書, 109ページ。
- 60) Memorandum submitted by the Council of the British National Bibliography, *Principal Documentary Evidence submitted to the National Libraries Committee, op. cit.*, p.A94.
- 61) 藤野寛之訳「国立図書館委員会報告」, 前掲書, 161, 212ページ。
- 62) 藤野寛之訳「白書」, 前掲書, 11ページ。
- 63) 松村多美子「ブリティッシュライブラリー第一年次報告1973-74」, 前掲論文, 241ページ。
- 64) アンディ・ステイーヴンス, 前掲書, 120-121ページ。
- 65) IFLA世界書誌調整事務局(IFLA International Office for Universal Bibliographic Control)が1974年に設置されたのはBLであった。世界書誌調整(Universal Bibliographic Control, UBC)については、次の文献を参照すること、Anderson, Dorothy, "Universal Bibliographic Control", *Encyclopedia of Library and Information Science*, vol.37, New York: Marcel Dekker, 1983, pp.366-401.
- 66) アンディ・ステイーヴンス, 前掲書, 76ページ。
- 67) 同上書, 95-96ページ。
- 68) 藤野寛之訳「国立図書館委員会報告」, 前掲書, 31ページ。

参考文献

- 黒木努「The British Library 創立過程とその構想」『現代の図書館』, 12(2), 日本図書館協会, 1974, 87-91ページ。
- 松村多美子「British National Bibliographyの機械化」『ドキュメンテーション研究』, 24(9), 情報科学技術協会, 1974, 349-356ページ。
- Hoare, Peter, ed., *The Cambridge History of Libraries in Britain and Ireland*, Cambridge: Cambridge University Press, 2006, 3 vols.

(2018年11月23日掲載決定)